

# 『我が人生思い残すことなし』(前編)

きたこう はると  
作：北郷 遥斗

※ 前回までのあらすじ ― 神戸大空襲の後、母と弟妹たちは広島へ疎開したが、昭男だけは、一人家に残った。戦況の行方を気にしながらも、間もなく実現する志願の日々を心待ちにひもじい毎日を送っていたある日、突然1年以上も行方不明だった父親が帰ってきた。―

(尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。[www.kyodo-keiei.co.jp](http://www.kyodo-keiei.co.jp))

## 7. 真実

「家、残ったんやな。空襲大丈夫やったか。ちょっとはずれとったとは聞いたけど。」  
「入又大や。まめ、入りいな。」昭男は父を促した。「入りいなく、ここはわしの家や。しん  
ボロでもな。」父は、こんな時でも、軽口を忘れなかった。「何言うとなん。ただの借家や  
ないけ。」昭男も負けてなかった。

「ほんまか。」昭男は短く聞いた。「何がや。」「さっき言うてた事や。沖縄は玉砕したんか。大和は沈んだんか。ドイツは降伏したんか。」昭男にとってはどれも信じがたいことだった。昭男が毎日聞いていたラジオからは、そんな事は一切言われてなかった。いつも『善戦』、『転進』、『決戦間近か』という様な言葉ばかりだった。「それがそついつ意味や。豈は『負けしる』言つてや。お前何も知らんかつにんか。」父は至く兄越  
くすかの様に話した。「まめ。無理もないな。『国氏はそつやつしいつても国に騙されしんねん  
ゆ  
それいな、ラノメリカじえらいとごかい爆弾使つておらしいと。一発ご何千人も殺せるんや  
と  
そうになったら、日本は終わりやで。人も街もみんななくなる。」昭男は呆然として、聞き  
ながら、既に魂の置き場所を見失っていた。

父の言つ事は、至部本当の事につに。『何も知らんかつに。いや何も聞かされしへんかつ  
た  
『俺はどないしたらええねん。』「ところで、母ちゃんらは。」父が思い出した様に聞いて  
来た。「広島に疎開しよった。高子も皆んな一緒や。」「そうかいな。実家のおばあちゃん  
とこか。その方が安心やな。お前は行かへんかつたんかいな。何んでや。」「軍隊に入る。」  
ちょっと間があって、昭男は弱々しく答えた。「まだそんなこと言うとなんのかいな。  
さっきも言ったやろ。日本は負ける。死に行く様なもんや。」「死にたいんや。」昭男は  
やけくそになっていた。「あほ。簡単に死ぬ、死ぬ言うな。」「ええか。日本は負ける。  
しゃあけど国はなくならん。お前の一生はまだ始まったばかりや。先は長い。そういうもの



本当の勤めは、戦後の新しい日本を建設するために働くこと  
や。」「右いめんがおりん様になつたら日本はこないしく立  
ち  
直んねん。」昭男は溢れる涙をこらえるのに必死だった。

「ほんでな。今、わし奈良におんねん。柿畑借りたしな。  
手伝どうてくれへんか。」今の昭男には、もう冷静に物事を  
考えることが出来なかった。「行けへんやろ。お母ちゃんら  
待つてらなめかんし・・・。」そつ合えるのが精一杯につ  
た

「はんたら、広島まじ迎えに行つたらええ。ほんで皆んなじ移うつ。」父は裸り返し言つた  
が  
昭男は首を縦には振らなかった。父は、次の日朝早く一人で帰って行った。昭男は一晩中眠れ  
なかった。自分の人生が音を立てて崩れていくのに耐え切れなかった。

(つづく)